

石見銀山の歴史と文化を次代につなげる

GUEST

中村俊郎

中村ブレイス株式会社代表取締役。島根県大田市大森町生まれ。京都・米国で義肢装具づくりを学びUターン、1974年、26歳で只一人で創業。ゴースタウン化する町の活性化に努める。石見銀山に関する資料収集により世界遺産登録に貢献、空き家となった古民家41軒を自力で新・改築し店舗や社宅等に活用。メセナアワード2010「メセナ大賞」受賞。



- 急速な過疎化が進む町で起業、若い社員とともに義肢づくりに励む。
- 支えてくれた地域への貢献、石見銀山とマルコ・ポーロの歴史と文化を伝えたい。
- 他者の喜びが人を育て、技術を磨き、世界に求められる仕事を生み出す。

過疎の町で起業、石見銀山の世界遺産登録へ

中村ブレイスがある島根県大田市大森町は、今、人口412人、戸数は195軒ほどだろうか。広島からも東京、九州からも遠く、恐らく日本で最も交通の便が悪いところだ。かつては石見銀山の銀山町として賑わい、人口20万人、お寺が100軒もある文化豊かなまちだった。それが大正12年の休山により、銀のまちが廃れていく。大森町の助役をしていた父は、私が12、13歳のときに「マルコ・ポーロを知っているか？」と尋ねた。過疎化が激しく、ゴースタウンになるような山のまちだったが、父は、このまちの夢をマルコ・ポーロとあわせて語ってくれたのだ。

当時、中村の家も傾きかけたような状況だったが、母は「俊郎はしあわせだ」といった。「あなたは、この石見銀山の人たちにかわいがられて、地域の愛情で育ったのだ」と。この「マルコ・ポーロと石見銀山」ということがなければ、私もまちに帰ったかはわからない。アメリカまで行って苦労して義肢装具を学んできたのに、病院もない山の中で、明日から仕事などあるわけがない。皆も、なぜゼロから始めなくてはならないのかと思っただろう。だが、自分が好きなまちに帰って起業し、父の夢だったまちの再生に取り組みたかった。

自宅前の納屋を改装した10坪の工房から始めて、最初の仕事は1万2,300円のコルセット1つだった。しかし年月が経ち、社員も増えて、10万の人に義肢装具をつくれるようになったならば、支えてくれた地域の人たちに恩返しをしなければいけない。空き家も改修すれば、社員の家族が住める。今、60〜70人ぐらいが暮らしているので、大森の人口の何パーセントかにはなっている。ものづくりをしながら、まちづくりにも協力できる。

さらに文化のエネルギーを持った人たちが支えてくれること

が、大きなうねりとなって広がってきたのだと思う。石見銀山が世界遺産登録されたときは、日本中から100万を超えるほどの人が来られた。今は年間60万人ぐらいで落ち着いているが、まちの人に誇りや喜び、自信が生まれてきている。山の空気や緑の素晴らしさを楽しむ方々が増えるとともに、石見銀山の歴史を研究して世に広めたいというグループが現れてきた。東京大学や京都大学、筑波大学など、教授やゼミの学生などがおいでになる。

ただ観光だけのまちにはいけない。歴史と文化がある中で、地道にものをつくったり、人に対するやさしさがあるまちになればいいと思う。皆さんから「小さなまちだけれども、楽しそうに生活しているな」といわれるようなまちにしていきたい。





他者の喜びが若者を育て、技術を磨く

かつて作家の松本清張先生が銀山周辺をモデルにした『数の風景』という小説を朝日新聞に連載していて、1986年には、私どもの会社にも立ち寄られた。当時30人ほどの若者たちが義肢づくりをしている姿に感心され、自分は小説家としてあなた方をサポートしたいと、「空想の翼で翔け、現実の山野を往かん」という言葉を私と妻にくださった。清張先生は私たちに、患者さんやお金を提供してくれたわけではない。しかし、石見銀山で頑張っている若者たちを応援してやりたいと、あたたかい言葉をくださったのだ。

実際には、一人の若者を技術者として育てるまでに少なくとも20年、人によっては25年かかる。だが、石見銀山の鉱夫たちが培った銀の精錬技術や発掘技術、鉱山を見分ける技術、そうしたDNAがあるのだと思う。昔から「石見左官」「石見大工」という手作業の文化は石見地方にあった。鉱山はなくなったが「何もない」のではない。実直な若者たちが、ものづくりに対する素晴らしい意欲を持って仕事をしている。これで何百万になるとかではなく、やってあげなくてはならない、喜ばれる顔を見たいと、一生懸命努力している。

ある社員は、10歳のときに両足を切断して、私が彼の義足をつくったことから、この仕事がしたいと、まだプレハブの社屋だった中村ブレイスに入ってくれた。彼は自分が体験したことを伝えよう

と、障害のある方々のために懸命に仕事をしている。またシリコンゴムで、手指や人工乳房をつくっている社員も懸命にチャレンジしていて、私は彼らを「メディカル・アーティスト」と呼んでいる。ときには、「こんなものは、ほしくない」という批判も受ける。それに耐えて悩みながら、できたものが誰かの手元に届き、喜ばれることの嬉しさは尋常ではない。つくるだけではダメで、喜ばれる反応を見て、さらに頑張ろうと向上していく。

数年前から私は、社会保障制度も整っていない途上国や、紛争が起きているアフリカ、アジアの人たちに、どうしたら我々の仕事を活かせるかと考えてきた。現地にある文化、現地の人が持っている技術をうまく活用できないかと考えて、2年前、フィリピンの両足欠損の少年に竹の義足をつくった。天然の竹や木材を使って、竹細工の職人の高い技術と誇りを大切にしながら、貧困な国でもつくれる義足。社員からは、プラスチックや金属の義足で障害者が走れるときに、竹の義足をつくるのはおかしいと反対された。だが、お金のある人ばかりが私たちの仕事の対象ではない。

40年前に石見銀山に帰ってきて、いずれは世界の人たちと仕事をしたい、ここから何か発信したいという思いがあった。世界70億人の中で仕事をするということは、自分の力だけではなく、それぞれが持っている能力、知恵と技術を融合しなくてはならない。「大地を一人で歩きたい」という少年の夢を実現できるのは、現地の技術と文化、人々の誇りとやさしさがあってのことだと思う。

コミュニティに働きかけるアートプロジェクト

GUEST

白川昌生

アーティスト。国立デュッセルドルフ美術大学卒業。1993年に地域とアートをつなぐ美術活動団体「場所・群馬」を創設。2007年「フィールドキャラン計画」（群馬県立近代美術館）、2011年「駅家の木馬祭り」（前橋市美術館準備室）など。「水と土の芸術祭2012」（新潟）では商店街で放送するミニFM局「沼垂ラジオ局」を運営。



- 人の記憶、地域の産業や歴史に基づくアートプロジェクトを提案、現実に関わりかける。
- 義務や仕事ではない自由な協働が、関わる人々を動かす。
- アート活動は贈与的なもの、見返りを求めず与えることで信頼を得る社会のあり方。

地域に関わるアートプロジェクト

1993年に始めた「場所・群馬」は、場所に興味がある人に集まってもらい、一緒に何かをやろうと提案する活動。出入り自由で、フリーなかたちで関われる媒体をつくっている。

渋川で行った「プラットフォーム計画」では、回覧板で「あなたにとって大切な場所を教えてください。その場所で話を聞かせてください」と広報し、4人の方が参加してくれた。ある女性は、渋川のまちで子供と遊んで帰るときに、必ず駅のそばのペットショップで時間を過ごしたことが深く記憶に残っていて、そこで写真とビデオを撮影して美術館に展示した。家族や友達、人のつながりは記憶でできており、非常に大切なものだと思う。

2005年に前橋で「全国アートNPOフォーラム」があったときは、商店街にアートカフェをつくった。群馬県は絹の生産で栄えたが、今は若い人が服飾デザインをやりたくても、学校を卒業すると活動する場所がない。そこで、アートカフェでつくった服を展示した。また、前橋は町の花がバラで、バラ園の息子さんがカフェにバラを提供してくれた。地域の産業としてバラをつくっているだけではダメで、バラを使って何かをやりたいということで、その人と組んでバラの花をテーマにした作品を何回かつくった。いまや、そのバラ園は全国的に有名になり、宮内庁でも国賓を迎えての晩餐会ではこのバラが飾られている。

太田で江戸時代から続く島岡酒造という酒屋の酒蔵が全焼し、酒造りがかなり厳しくなったということを新聞記事で読み、ぜひがんばってほしいと、勝手にその酒屋さん用のポスターをつくって展覧会を開いた。それがNHKで放映されたところ、激励の手紙や電話があり、1年後には酒蔵を建て直してお酒をつくり始めている。

商店街の若い人たちとつきあう中で、前橋にはキャッチフレーズになるようなものが何もないと何度も聞いた。有名などころでは国定忠治がいるが、ヤクザなので行政としてはまちおこしに使用できない。萩原朔太郎もいるが前橋が嫌いに出ていったので微妙な距離感がある。そこで、江戸末期に生きた国定忠治の息子の長岡寅次が、明治の初めに生まれた萩原朔太郎とつながるという仮想の物語をつくり上げた。前橋の名前のもとになった駅家（うまや）にちなむ「駅家の木馬祭り」という話で、寅次は弁財天から木馬祭りの実施を促される。これを2011年、前橋市立美術館準備室ができたときに実現しようということになり、子供たちを木馬に乗せて商店街を皆で練り歩いた。地域の歴史を再構成して、自分たちで読み替えていくもので、とても喜んでもらえたと思う。

2012年に新潟で行われた「水と土の芸術祭」では、メイン会場から外れたところにある古い地区で「沼垂ラジオ」をやった。昭和の初めのような風景が残っているところで90MHzのミニラジオ局を開いたが、プログラムは事前には何も決めていなかった。地域の人たちがブラッとやって来るようになり、少しずつ話をしながら皆でプログラムを決めていった。沼垂弁という古い方言があるとなると、「じゃあ、沼垂弁講座をやってもらおう」ということで、70幾つの佐藤さんという方に毎週末20分ほど話してもらった。自分で10枚ぐらい原稿を書いてきて、きっちり読んでくれる。そういうことが始まると、他の人も「私もしゃべりたい」と出てくる。終戦記念日の前には、戦争についてしゃべりたいというおばあちゃんに来て、昔の思い出や尋常小学校の子供たちが戦争のときに書いた作文を持ってきて読んでくれたりした。



贈与的なアート活動がつくる関係性

こうして、「場所」をテーマにいろいろと提案して、一緒にやりたいという人たちが集まってくれて活動を行っている。僕一人ではできないし、来た人たちが自分からアイデアを出すので、実際に始めると違うことをやり始める人が必ずいる。でも、方向性が違うとか「やってはいけない」ということもない。大切なのは、関わった人が抱くイメージを形にして、それぞれに理解し考えながらやっていくこと。そういう状況が生まれれば、ほとんどの人が面白いアイデアを出し、その人ならではの役割を果たす。全体で何かをやっているように見えても、本当は、個人の中で何かが起こっている。

アートというのは、文化人類学的にいうと宗教や呪術とつながっていたりする。そうした活動のほとんどは、人間が生きながら頭をフル回転させて、自分の周りの世界とどのようにつきあっていくかをジタバタした結果だ。人間は一人では生きていないので、そうした活動はお互いに影響を与え合う。

人間の基本的な関わり方の出発点は家族だが、親は子供を育てるのが当たり前で、子供に見返りは求めない。食べ物を与え、あたたかくし、寝るところを確保してあげる。そういうことを無償でやり続けると、子供は自分の周りで起こっている出来事に、ある種の安心感や満足を感じる。心の深いところで得られる安心感

が、周りの世界に対する信頼や人に対する信頼という形で表れてくる。「いくらお金を渡したから、お前はこうしろ、ああしろ」ではなく、無償で自分から投げかけていって、それによって生まれる相手との関係。家族の信頼関係と同じような核が社会のあちこちにあると思う。そういうものがあって初めて、協働の中で一つの社会が動いていく。世界と人間が関わっていくとき、どうにもできないことをジタバタしながら解決しようとする、そういう中にアートの活動があると思う。

そうした意味ではアート活動は贈与的で、お金で計算するようなものではなく、人間の気持ちや信頼といったところから生まれてくる社会のあり方だろう。ビジネスも突き詰めていくと最後は信頼で、他の人からの信頼を得ているから大きなビジネスができる。人から信頼されなくて、金勘定だけで生きているような人間は、恐らく何をやってもダメだろう。

いままでこういう活動をやってきてよかったと思うのは、誰も途中で逃げずに最後までつきあってくれたこと。別に「あなたがいないてはならない」とはいわないし、去りたい人は去ってもいいという緩やかな関係でやっていて、相手に負荷をかけない。義務ではなく一緒にこういう活動をやすることで、会社の仕事とは違う楽しみが生まれ、それがその人の記憶に残って、「ああいうつながりがあった」というように世の中を見られるといいかと思う。

一次産業×デザイン＝ニッポンの風景

GUEST

梅原 真

デザイナー。高知市生まれ。1988年、かつお一本釣り漁師とともに「一本釣り・薫焼きたたき」を商品開発、8年間で20億円の産業となる。他に、4kmの砂浜をミュージアムに見立てる「大方町・砂浜美術館」や、「しまんと紅茶」「しまんと地栗」をプロデュース。現在「しまんと新聞バッグ」を世界に展開中。



- 文化は絶対価値。それぞれの地域がもつ個性を活かす発想を。
- 四万十の中山間地域にあるものにデザインを掛け合わせ、新しい産業にする。
売れる仕組みまでを考えるのが「デザイン」。
- 面白い知恵や工夫は世界とつながる。デザインの概念を持つことで日本の文化を確認する。

地域の絶対価値に目を向ける

高知城の脇に370年続いている市があって、日曜には1.5kmにわたってテントが並ぶ。そこではダンボールにマジックで、漬物だと「100g、80円。少し酸っぱい2年もの」とか、「味の良いつぶあん」とか書いてある。「あまいサトウキビ」じゃなくて「あまい、あまいサトウキビ」、「朝倉のイモ、ホロホロ」とか、「ちょっと習字やったんちゃう？」みたいなオバチャンが売っていて、この状態をつくりだしたデザイン力は素晴らしい。子供のころからこれを見て育って、やがてデザイナーになったときの師匠というか、何かを感じるもとはこの文化だったと思う。

2010年の製造品出荷額の都道府県別順位では、高知県は一番ベッタ。一番「下」が高知、それから沖縄、鳥取、島根、秋田、宮崎、青森。一番上は愛知県、それから静岡、神奈川、大阪、兵庫、千葉、埼玉となる。この順番は経済の数値を比較した相対価値で、文化じゃない。高知も青森も大阪もそれぞれに絶対価値があって、高知県のジメッとした空気感とか天日で干した塩、「カツオを薫で焼くよ」という話、その個性を楽しむ。観光は「光を観に行く」と書く、どこかに移動して新しい光を観たい。それを相対価値で括って、都道府県別GNPみたいなもので量ってきたから日本はダメになったのではないかな。

明神水産の「薫焼きたたき」は、「船がつぶれるんじゃ!なんとかしてくれ」という相談から始まった。カツオ漁は一本釣りで、2月に出航したら気仙沼沖まで行って、戻りカツオを追いつつ千葉沖辺りで漁を終える。10か月かけて、一本一本釣っているから全然儲からへん。しかし、一本釣りというマイナスの要素に薫というマイナスのものを掛け合わせて、マイナス×マイナスはプラス。

「漁師が釣って 漁師が焼いた」というワンフレーズを入れながら売ること、4年目には工場を建てた。

大方町の砂浜美術館は、25年前に東京の開発会社が、ここにビルを建ててゴルフ場やサイクリングロードをつくるというプランを書いてきた。それよりも、「砂浜しかない」ところにTシャツがヒラヒラする風景を美術館にしようと。裸足マラソンで片道4kmをゆっくり往復したり、2時間でキスを何匹釣るかを楽しむ。そこに流れてく漂流物を使ってデザインする「漂流物展」もやる。

高知県は47番目の県。金がないから、ベッタやから面白いものができる。「ごみでポスターできるやないかい」とやっていたら、ビンに入った手紙が流れ着いた。ニューメキシコに住んでいるブライアン君が小学5年生のときに流したもので、連絡を取ったら大学生、それだけの年数がかかっていた。それからブライアンとの交流が始まったことが、中学の英語の教科書に「ブライアンの手紙」として掲載されている。文科省に頼んで「教科書にしてくれ」とはいうてない。「ごみ拾っていたら、教科書になった」という話のほうが面白い。



中山間地域にあるものをデザインで磨く

四万十ドラマという第三セクターの会社が20年前にできた。彼らは栗や茶など町村の産物を売りに行くけど、なかなか売れない。人間は相手が「どんな男やろ」というのがわからないと買ってくれない。そこで、こちらがどんな人間なのかを示すために、四万十ドラマの本を出版しようと。「日本最後の清流」といわれる四万十川だから、「水」という本をつくらうと著名人45人に手紙を出した。原稿料は「アユを1kg、3年間送ります」で、ゲットしたのが18人。

それから商品開発。四万十川の畔にある段々畑では手摘みでお茶をつくっている。四万十でお茶が栽培されていることは、高知の人間は誰も知らない。静岡へ送られて、香・甘・苦・渋の「渋」にあてがわれてしまう。ところが段々畑にズームインしてみると、朝霧の立つ素晴らしい風景の中に、こんな老夫婦がいる。なんと40年前まで、ここでは紅茶がつくられていた。明治政府が世界の需要があるとうので、日本各地で紅茶をつくっていた。それを、「40年前の味で新発売」いうたら「どんな味よ？」となる。相手の心にグサッとくるような言葉を探し当てて、中山間地域にあるものにデザインを掛け合わせて、新しい産業にする。

栗も、10年前はキロ200円で、産業にならないから年金をもらいながら仕事をしていた。しかし、名前を変えてみる。「四万十栗」というとサラッと流れるけど、「四万十地栗」。その土地のものや、といって、三本川に栗があるビジュアルにしたら急に売れていく。このロールケーキは栗が7粒入って3,000円、高級通販で売れている。ところが道の駅に置くと、まったく売れない。だったら、これをつくるまでに割れたやつを商品にしようと「四万十地栗・われ」。同じ栗でも割れていて1,800円。3,000円の商品の横にこれを置くことで、ずっと売り切れ状態。「1,800円か、高いな」と思いながらも買う、そのメンタルをデザインする。

それから四万十ヒノキ、ピンク色をした材で床柱になるけれど、今は家が建たないから売れない。そこで、10cmの板に「四万十の天然ヒノキ風呂、ボカボカ」という焼き判を押した。ヒノキから採った油成分につけて袋に入れて、風呂に置いておくと3日間はヒノキ風呂の香りがする。これを四国銀行が厚生年金の引落口座を開設した方へのノベルティにした。次は四国電力が、朝日新聞が、というように2年間で1億売れた。木材だから家が建たんとダメじゃなくて、ヒノキは匂いやで、と香りビジネスが始まっている。

高知県は森林率が84%と日本一。間伐した森は光が差して多様な生態系が生まれているが、補助金をもらえなかったところは放ってあるので虫も鳥もいない。そこに光を見出すために、「84プロジェクト」というものを立ち上げて、シンボルマークをつくった。間伐を1トンしたら、そのヒノキ油を使って間伐四万十ヒノキ風呂をつくる。ビール6本入りのカートンにノベルティでつけると、「ヒ

ノキ風呂に入ってビールを飲もう」みたいなことになる。そんな妄想を働かせながら、「84」のマークを展開していこうという戦略。

四万十の畔からの発想が世界とつながる

四万十の一斉清掃の日、辺りのごみを拾っていると、レジ袋が木に引っかかってヒラヒラしている。それを箒で落として集めるのが嫌で、四万十川流域で売るのは新聞紙で包みましょう、と新聞バッグをつくった。昔は、なんでも新聞紙で包んでいた。自分をつくったらすぐ破れたが、四万十ドラマ従業員の伊藤さんがつくてきて、このデザイン性にはビックリした。これもホームページ上で、つくり方の映像を加えて展開していて、年間150万ぐらい売っている。

これをベルギーの放送局のディレクターが面白いといって、35万部発行の新聞社モルガン社と掛け合い、見開き2ページを新聞バッグのために提供した。アントワープの有名な4人のデザイナーが週替わりで、月曜の朝刊に新しいデザインを載せる。新聞バッグ用に紙面を提供することで、ベルギーの人たちは皆これをやった。

それで、これは被災地の仮設住宅でつくるのにちょうどいいのではないかと、「四万十ニュースペーパーバッグ東北プロジェクト」というノベルティに仕立てた。1つつくると250円、これを高知銀行とつないで、10万円以上貯金した方に差し上げる。東北でつくる仕事をつくる、そういう仕組みまでがデザインだと、今年の3月11日からスタートした。

小学校のときから、国語、社会、算数、理科……で、下のほうに図工があった。この図工という概念が文化的なものを阻害している。いままでの話は全部、図工じゃなくてデザイン。だから「図工・デ」という授業をやって、子供に「ケーキ屋さんをやるとしたら店の名前を何にする？どんなケーキを売るのが？どんな箱に入れるの？」と考えさせる。日本では昔から家紋のような優れたデザインがあるのに、「デ」という言葉が出てこない。「図工・デ」を入れることが、日本の文化を認識する、あるいは確認することになるとずっと思っている。

皆、頭の中は平等で、ニューヨークにいるからいい仕事ができたり、条件が良かったりは全く関係ない。むしろ四万十川の一斉清掃の場にいたから、新聞バッグのアイデアが生まれたし、四万十川の畔から考える知恵や工夫というものは世界とつながっている。何を発想し、組み立てると面白い。日曜市のテントの下で、ちぎったダンボールに赤と黒のマジックでどう書くかを工夫して、こう置いたらトマトがよく売れるんじゃないかというのを、通る人の顔を伺いながら370年もやってきた。パリでもニューヨークでも、四万十でも、デザインはどこでもできる。「高知だからできない」ということは何もない。

文化の経済的インパクトをどう測るのか?! —英国の実践から—

GUEST

リチャード・ラッセル（アーツカウンシル・イングランド政策調査部門ディレクター）

アーツカウンシル・イングランドにて政策調査を担当するほか、戦略的リサーチプログラムを手がける。Nesta、アーツ&ヒューマンティ・リサーチ・カウンシルと共同で新たな助成プログラム“デジタルR&D”をスタートさせたほか、文化芸術機関の経済的利益に関するガイドラインの策定、各都市の文化に関するデータを集積するオンラインプラットフォームの立ち上げを行う。さらに、芸術とクリエイティブエコノミーに関する政策策定にも関わる。

インタビュアー | 太下義之（三菱UFJリサーチ&コンサルティング 芸術・文化政策センター主席研究員）

コーディネーター | 湯浅真奈美（ブリティッシュ・カウンシル アーツ部長）



- 厳しい財政状況で文化予算が削減される中、芸術・文化の経済的価値を強調。
- 芸術・文化セクターは成長分野、クリエイティブ産業、観光、教育に対しても大きく貢献。
公的資金投入の正当性を証する具体的なエビデンスを示す。
- 芸術・文化の価値は現在の市場経済では完全には評価できない、
従来の産業構造を革新するところこそ本質がある。

厳しい国家財政のもと、 アーツカウンシル・イングランドの戦略とは

2010年に労働党から保守党と自由民主党の連立政権に交代し、翌年には大きな歳出削減策が取られ、文化予算は5年間で30%削減が打ち出された。アーツカウンシル・イングランドも2011年から4年間で29.6%の予算削減となり、厳しい状況にある。

アーツカウンシル・イングランドでは2010年、「Achieving Great Art for Everyone」（あらゆる人に素晴らしい芸術を）と題したビジョンを打ち出し、5つの大きな目標を立てた。

Talent and artistic excellence are thriving and celebrated

才能と芸術的卓越性が繁栄し、称賛される

More people experience and are inspired by the arts

より多くの人々が芸術を経験し、インスピレーションを受ける

The arts are sustainable, resilient and innovative

芸術分野が持続可能であり、回復力があり、革新性を備える

The arts leadership and workforce are diverse and highly skilled

芸術分野のリーダーや人材は、多様かつ高度なスキルを持つ

Every child and young person has the opportunity to experience the richness of the arts

全ての子供や若者が、芸術の豊かさを体験する機会を持つ

これら5つの目標を実現させていくために何が必要なのかを見直し、戦略的に展開していこうとしている。そのためにまず、従来の助成プログラムをあらため、「National Portfolio Funding」（全国戦略に基づいた助成）として、2012年から3年間にわたり助成する対象を定めた。芸術・文化に関わる組織や団体の基盤を強化するために、新しい試みにも積極的に取り組んでいる。

一つは、デジタルメディアの活用の推進である。例えばBBCと協力して展開している“The Space”は、観客がさまざまなジャンルのアートをオンラインで体験できるプラットフォーム。芸術団体が自分たちの活動を普及し、さまざまなつながりを築く上で、デジタルメディアが持つ潜在的な可能性と将来性を認識できるようサポートしている。

また、高齢者に対する取り組みも始めた。高齢になるほど、芸術文化に触れる機会が減ってくる。そこで、老人福祉施設に入所している方々が芸術・文化に触れ、創造的な体験ができる機会を増やす試みをベアリング・ファウンデーションと協働でスタートした。

厳しい財政事情の中で文化予算の正当性を訴えるには、文化に予算を投じることの意義をどのように証明するかにかかっている。芸術・文化が人の生き方にどういう影響を与えるのか、社会的な影響や効果はあるのか、経済的な側面から見てどうなのか。どのようなエビデンスが存在しているのかを踏まえた上で、広く社会に対して、政治家に対して、政府の省庁等に対して、公的資金を投入するだけの価値や意味があるということを具体的に伝える必要がある。

研究レポート「芸術・文化の国内経済への貢献」

2013年4月、文化・メディア・スポーツ省(DCMS)のマリア・ミラー大臣は芸術・文化の経済的影響についてスピーチを行い、同年5月にはレポート「The contribution of the arts and culture to the national economy」(芸術・文化の国内経済への貢献)がアーツカウンシルから発表された。同レポートでは芸術・文化の直接的な経済への貢献と、観光産業や地域活性化などへの波及効果について言及している。

直接的貢献('direct' contribution)の例

- 国家予算に占める文化予算は0.1%に過ぎないが、GDPでは0.4%を占め、投資に対するパフォーマンスは非常に高い。
- 芸術・文化セクターは成長分野であり、2011年度の粗利益は124億ポンドと大変大きい。
- 芸術・文化セクターにおける雇用はイギリス全体で0.45%、イングランドでは0.48%ある。

間接的貢献('indirect' contribution)の例

- イギリスを訪れる外国人観光客のうち芸術・文化の鑑賞を主な目的としたり、旅行中に芸術・文化に触れることによる支出は、少なくとも年間8億5,600万ポンドある。
- クリエイティブ産業に従事する人材のうち、約8割が芸術・文化団体でのインターンシップなどを経験しており、芸術・文化団体はクリエイティブ産業を目指す若者にとってインキュベーター的役割を果たしている。
- 2008年にリバプールがヨーロッパ文化首都に選ばれた際、クリエイティブ産業が8%増加し、地域経済の活性化につながった。

このレポートによって、芸術・文化と経済の関連性や、観光や教育、将来の産業に重要な役割を果たしていることが数値として示された。今後、政府がさまざまな政策において芸術・文化の影響を活用していくよう、これらデータを使ってアピールしていきたい。芸術・文化の分野は小さいながらも経済的な存在感があり、このレポートによって、他の産業分野よりも大きく貢献することが実証されている。

文化の経済的価値の評価について

太下: ミラー大臣の演説に対して、スコットランドのフィオナ・ハイスロップ文化長官は「文化にはそれ自体に価値があり、経済成長という文脈の中で語ることは同意しない。文化の経済的価値は副次的な面であり、スコットランドの文化長官として、こうした矮小化する趣向で文化を探ることはできない」と批判している。こうした反論は、イングランドとスコットランドの歴史的背景から出てくるものなのか、あるいは別の、経済や文化に対する意見の違いなのか。

ラッセル: 英国政府全体としては、まずは赤字の縮小が大目的で、さらには成長戦略を打ち出している。そのため各分野に対して、経済的な発展や経済に対する貢献を強調している面がある。スコットランドは2014年に、英国連邦王国の一員であり続けるか、それとも独立した国家となるかの国民投票が行われるという背景がある。もとより、スコットランドの国民意識において、芸術・文化が極めて重要であることは申し上げるまでもない。

根本的に、文化の価値は絶対的な価値であるという基本理念は譲れない。ただし、それに加えて、芸術・文化は経済においても存在感のある分野であり、そうしたプレゼンスのあるものだという主張である。決してそれを目標とするわけではないが、経済的な影響や成果を確実に出しているということだ。

この分野の評価は難しいが、マンチェスターに拠点を置く文化団体の協力を得て、クオリティ評価の方法に着目したプロジェクトを行っている。彼らの活動がどのように人々、そして「同業者」や「専門家」に届いたのかという面から、助成を受けている団体の活動のインパクトを把握し、評価する方法について検証している。

太下: 近年、非経済的な価値に対する評価が世界的に高まっている。アメリカの都市経済学者、リチャード・フロリダは著書『クリエイティブ・クラスの世紀』で、クリエイティブ経済の規模は既にカナダのGDPに匹敵すると指摘している。こうしたことを考えると、芸術・文化については既存の市場経済における価値だけではなく、非経済も含めた新しい評価が望ましいのではないかと。

ラッセル: どのような状況においても、本当に経済的価値と無関係ということはある得ないのではないかと。一見無償で行われている活動でも、必ずコストの要素はあるし、また、そういった評価の仕方があると思う。例えば、美術館や博物館などは入館無料が当たり前になってきているが、もしあなたが入場料を払うとすれば幾らの価値を設定するか、という考え方だ。さらに、美術館や博物館には、政府が税金などから負担するコストもある。

太下: 今回のレポートと同様に、日本でも文化の経済波及効果をはかる取り組みでは、産業連関分析(Input Output Table)の手法が用いられる。例えば、ダムをつくる場合に100億円を投資すると、原材料のコンクリートを買うなど別の産業分野に波及し、それぞれの従業員に給料が支払われて、またいろいろな分野で消費されていく。こうして100億円のインプットが実体経済の中を循環して、2倍、3倍のアウトプットを生み出す。

したがって我々の社会が相変わらず現状の産業構造を持続けるとしたら、芸術・文化よりも従来型の産業構造の分野に100億円を投入したほうが、計算上の数値は大きく出る。だが、芸術・文化の価値は、従来の産業分野を補強するより、産業分野自体を革新していくようなところに本質があるのではないかと。逆にいえば、従来の産業分野や経済社会から出てきたモデルで測れるはずがない。日本も含め、何か新しいモデルを模索していくべき状況ではないだろうか。